

学 位 論 文 要 旨

氏 名 山 田 唯 仁

題 目 図画工作・美術科におけるソーシャルデザインに基づいた題材についての研究

複雑で多様な社会問題を抱える今日、消費のためのデザインと対に捉えられ、かつ人々にとってよいものや必要なものをつくりだす手段として「ソーシャルデザイン」が注目されている。そして学校教育では子どもが問題に向き合い、主体的に解決し、豊かな未来をつくりだしていくための学習が求められる。しかし図画工作・美術科ではデザインの重要な目的をふまえた授業は乏しく、色彩や形態を扱う技能の訓練としての学習が主とされがちである。

この背景から、本研究はソーシャルデザインに基づいた題材の教育実践により、造形を通して問題を解決する授業を構築することを目的とした。図画工作・美術科における造形の活動を検討するにあたってヴィクター・パパネックを先駆としたソーシャルデザインに焦点を当てながら、美術教育と問題解決のデザインの関係についての文献研究と、それをふまえた授業の構想・実践を行った。実践研究は勤務をする小・中学校をフィールドとし、題材ごとに子どもの学びがどのように展開されるのかを追うという参与観察の手法をとり、発達段階と学習内容の関連を基に事例を省察した。

第1章では文献研究により、デザインが生活や社会の諸問題を解決するという可能性が示され、問題解決の手段として注目されていったという展開を論じた。そしてパパネックのデザインに着目することとし、我が国における受容を調査した。パパネックが「少数のためのデザイン」の必要性を見出し様々な問題に取り組んだことについて事例を挙げながら論じ、我が国での受容を補いつつ、その理論を整理した。これにより抽出された「広汎な定義」、「複合的な機能」、「役割と責任」の概念を教育実践に向けた示唆とした。

第2章では美術教育における問題解決のデザインの扱いについて検討した。1958年度から2016年度までの学習指導要領からデザインの目的に関する記述を抜粋するとともに、各年度版を比較し変遷の特徴を明らかにした。これまでの学習指導要領に共通する特徴には、主に身近な生活を扱うことが示されており、美術教育においてデザインのもつ社会的な役割や責任について扱った学習内容は乏しかったことを示した。しかし現行の2016年度版は社会との関わりから構想を練るというように、これまでの学習指導要領と比べてもデザインの役割といった重要な概念と強く関連しうることがわかった。

第3章ではソーシャルデザインを視点とした題材・授業のために、発達段階と学習内容の関連を構想した。現行の学習指導要領にパパネックらの論を比較しながら取り入れ、子どもの発達段階と関連させたデザインの目的やプロセス、要素を設定した。学習の展開は「①生活や社会との関わり

からねがいをもつ」,「②仲間とアイデアを練る」,「③アイデアをテスト・提案する」,「④振り返り・デザインの批評」である。またデザインの要素は【A:方法】、【B:効用】、【C:ニーズ】、【D:目的】、【E:連想】、【F:よさ・美しさ】である。

第4章では小学校での事例研究を行い、低学年の子どもはおもちゃをつくり遊ぶなど自分の好きなことを中心に身近な人と関わり、学年が上がるにつれて他の人に対する意識が広がり、高学年から生活や社会の問題を扱うという学習の関連を示した。なお低学年は主に、飾ったり遊んだりするものをつくることや、身近な材料にふれることを通し楽しく活動すること、また中学年は身近な仲間とコミュニケーションをとったり、遊んだりするための工夫をして表すこと、高学年は身近な問題に対するデザインの働きについて考えながら想像したことを伝える題材を扱った。

第5章では中学校美術科におけるソーシャルデザインとして、生活を彩るブックデザイン、学校のピクトグラム、サステナビリティを前提としたものづくり、社会の問題を解決するデザインを実践した。これによりモリスを先駆とする美しいものをつくることと、パパネックによる必要なものをつくることというソーシャルデザインの考えを授業として具体化した。これらの中学校美術科の授業では、様々な場におけるデザインの役割についての扱いが可能であることを確認した。

終章では構想・具体化した題材と授業の意義について3つのことから考察した。1つは近年求められている学校教育に対応した図画工作・美術科のあり方として、ソーシャルデザインに基づき子どもが問題に向き合い、主体的に解決する教育活動を構想したことがある。2つ目はこれまで扱われにくい傾向にあった学習内容である、問題を解決するデザインの教育を軸に置き、実践事例を基に具体化したことがある。これらは学校現場で不足している教育内容のうち重要な部分を補うものである。そして3つ目はソーシャルデザインに基づいた題材により発達段階と学習内容の関係を示し、小学校から中学校までの連携を前提としていることである。